

# 「え」の字史

や だ つとむ  
矢田 勉 (東京大学大学院総合文化研究科)

## 1. はじめに

図1は、慶應元年1865刊の『<sup>孝行繁栄</sup>目さまし艸人道二十四箇條』という教訓書<sup>\*1</sup>の一部である。同書は①「人道廿四箇条集書」(散文・挿絵に歌)、②「孝の道しるべ」(長歌)、③「<sup>家内安全</sup>富貴繁栄丸」(散文)、④「絵本目さまし艸」(冠にいろはを置いた都々逸)の四部からなる。図1-1は①の散文部分からで、「え」字に振り仮名「ミ」が付刻された例を有する。図1-2は②からで、大多数の例は「え」字に振り仮名を伴わないが、唯一例、末尾近くに出現する「花え」にのみ振り仮名「ミ」がある。図1-3は④からで、④ではいずれの例にも振り仮名はない。また、同書の全体を通して、「え」字は動詞「見る」に関わる例にのみ使用され、それ以外の音節ミには使用されない。逆に動詞「見る」が「え・見」以外の字で書かれた例も基本的にはない<sup>\*2</sup>。

このように、変体仮名そのものの衰滅が目前に迫った幕末においてなお、「え」は平仮名と漢字のあわいにある文字であった。

## 2. 初期平仮名体系における「え」

こうした「え」字の存在を根拠として、前近代の表記体系について、時に、平仮名と漢字とがその全体に亘って明確な境界線を持たなかったかのように論じられることもある<sup>\*3</sup>。しかし、「え」字の性格は、平仮名体系の中であって本来的に些か特異なものであった。下の表は、平仮名が仮名字体の種類を増加させるよりも前、10世紀以前の、原初的な平仮名体系における仮名字体を一覧したものである。

|     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| ア あ | カ か | サ さ | タ た | ナ な | ハ は | マ ま | ヤ や | ラ ら | ワ わ |
| イ い | キ き | シ し | チ ち | ニ に | ヒ ひ | ミ み | リ り | ル る | レ れ |
| ウ う | ク く | ス す | ツ つ | ヌ ぬ | フ ふ | ム む | ユ ゆ | ヨ よ | ロ ろ |
| エ え | ケ け | セ せ | テ て | ネ ね | ヘ へ | メ め | ヘ へ | モ も | ヨ よ |
| オ お | コ こ | ソ そ | ト と | ノ の | ホ ほ | モ も | ヨ よ | ロ ろ | ヲ づ |

原初的な平仮名字体体系 (□開きの字体はやや出現が遅れるか)

そもそも、平仮名の原初的体系では、1音節に字母の異なる3字体が併存するというこ

\*1 改めて確認するまでもないことだが、文献の表記史資料としての価値と文学史的価値とは少なくとも直接の関係は何らない。近世の場合、教訓書のような、想定される受容者を都市民に限らなかった文献は、寧ろより直接的に当時の社会全体に標準的だった表記規範を反映する可能性もある。

\*2 唯一の例外が、④で見出し字となった「みざる」である。

\*3 矢田(1999,2012)では「お」字に関わる仮名字体と漢字の草書体との関係性について論じたが、「於」の場合は音仮名であったこともあり、「え」の場合とは対照的に、差別化の力が作用した。

と自体が稀だった上、アヤ行のエなどのように音仮名の中から有力な万葉仮名を見出すことが困難な音節ならばともかく、「美」という常用の音仮名由来の仮名字体があり、更に訓仮名由来の「三」もありながら、三番目の仮名字体として訓仮名由来の「え」がこの仮名字体体系に加わっている<sup>\*4</sup>のは、奇妙にさえ思われることである。

10 世紀以前の平仮名資料で、「え」の確例が見出せるのは、「有年申文」(867 年頃)「円珍病中言上書」(891 年以前)である。その後、「因幡国司解案紙背消息」(905 年頃)、「石山寺本虚空蔵菩薩念誦次第紙背消息」(966 年前後)<sup>\*5</sup>や青谿書屋本『土左日記』(原本 934 年頃成)、「醍醐寺五重塔天井板落書(平仮名文)」(951 年頃)には「え」の例が見えず、「稿本北山抄紙背消息」(11 世紀初頭)に至って再び見える。なにぶん資料の少ない時代のことゆえ、偶然性の介入は当然否定できないが、その間に、同時期の純平仮名文とは異なる仮名使用の特徴を持つ藤原道長自筆本『御堂関白記』平仮名書き和歌(図 2・寛弘元年 1004 条)に例があることまでを視野に入れると、やや気になる点がある。それは、「え」が漢文との交用表記の場面に現れやすかったのではないか、ということである。

このことは、「…可我美奈須 美津能波麻備尔…」(万葉集巻 15・3627)に対する「…鏡成 見津乃濱邊尔…」(同巻 4・509)のように、訓仮名「見」<sup>\*6</sup>の正訓字表記との親和性も想起させる。「え」が片仮名の字母となった点もそれと関連があらうか。しかしながら、なぜ「え」が平仮名の原初体系の一員となり得たのかについて今はこれ以上立ち入ることはできない。

いずれにせよこれ以降、「え」字は近代初頭に至るまで衰退することなく、かといって決して「み」「と」を越える汎用・主用の仮名字体となることもなく、推移していく。

図 2 『御堂関白記』寛弘元年二月六日条裏書

六日雪深早朝左衛門督許かゝいひやるわら  
れつむかほのあらにゆ木  
ふれおころつうひをけふさへそやるかへり  
えをつめておほつゝ<sup>②</sup>れ木  
ひゆ木やまぬらほのあられわれ□□けり  
(後略)

### 3. 11-12世紀における「え」

10 世紀以前の平仮名資料における「え」は、使用される資料の性格に些かの傾向性があった可能性もあるが、特定の語彙の表記に偏するという特徴は見られず<sup>\*7</sup>、平仮名字体であったことは揺らがない。その後、平安後期から院政期にかけての平仮名資料では、「え」字は(漢文との交用でない)純平仮名文資料にも多く見られるようになるが、平仮名字体と断じて何ら問題ない用法を保っていることは変わらない。

この時期の消息資料<sup>\*8</sup>でも、「み」「と」に比して概して出現頻度は低い。使用語彙では「稿本北山抄紙背消息」では消息の常套語「ふえ(文)」に偏り、「不空三蔵表制集紙背消息」(11 世紀末)には「のえ(助詞)」「ふえ」といった例が見える。一方で「見る」とも解釈が可能な例を「不空三蔵表制集紙背消息」・「灌頂阿闍梨宣旨官牒紙背消息」に 1 例ずつ、「文泉抄紙背消息」(1175 年前後)に 2 例見出すことができるが、全体としてこの時代の「え」字の用例は「見る」にばかり偏るものでは全くない。

古筆資料では、筆者や資料によって「え」字の使用頻度は大きく異なる。例えば『源氏物語絵巻』詞書では、書風の類別のうちⅡ類にのみ一定数の使用が見られるが、Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ類には例がなく、Ⅳ類には 1 例あるのみである。Ⅱ類での例は「いえし(いみじ)」「なえ

\*4 念のために確認しておく、「美」「三」「見」は上代特殊仮名遣ではいずれもミの甲類。乙類の常用仮名「未・微・味」などは、いずれも当初の平仮名字体には採られていない。

\*5 共に動詞「見る」の例はある(「因幡」は非確例)が、「み」字で表記している。

\*6 ここでいう「ミツノハマ」は「御津之浜」であって、「見」は正訓字ではない。

\*7 「有年申文」は動詞「見る」の用例であるが、「円珍病中言上状」では「皆」、『御堂関白記』では「身」の例である。

\*8 調査対象は、久曾神昇編『平安時代仮名書状の研究』(増補改訂版)風間書房 1992 所収資料。

/ㇿ(涙)」「なえゝ(涙)」といったもので、寧ろ動詞「見る」には使用されていない。

歌書では、「え」字を比較的好んで用いる資料に「関戸本古今和歌集」、「香紙切」、「一条摂政御集」といったものがある。字の用例数が増えれば、それに伴って当然、動詞「見る」に関わる使用例も多くなるが、これらの資料ではいずれも、「え」字で「見る」以外の語彙を表記した例も複数見えるし、「見る」を「み」「と」で記した例も多く見えるから、「え」字も単にそれらと並存する仮名字体として使用されているものと解釈される。

#### 4. 中世における「え」

「え」字をめぐる鎌倉時代の実態は、多くの場合においては 11-12 世紀のそれと劇的に変わるものではない。鎌倉時代には、平仮名文が実用的用途にも広がった。そうした仮名文書類に見える平仮名字体体系は、11 世紀以降に大きく増加した平仮名字体が再淘汰された結果として、多くの音節に複数の頻用字体を備えたものである。そうした中で、「わ」「を」「ゑ」「い」「ふ」「え」「ゑ」「ゑ」などといったものが主要な仮名字体に昇格し、中には「わ」や「い」のように、一時的には従来の字体よりも主になるものさえ現れたが、「え」はその例には入らなかった。鎌倉時代の仮名文書では、「え」の出現頻度は概して低く、かつ使用例は「わゝえや(大宮)」「東寺百合文書ツ函 5/8「長谷部家地某譲状」1203 年]、「ゆいりふえ(譲文)」「同ツ函 6「清原ねう家地券文」1203 年]、「みええ(南)」「同ウ函 28/2「承範田地売券」1327 年]のように、全く動詞「見る」に偏らない。この時代に多い男性仮名消息でも使用例は稀で、例えば源空、親鸞、日蓮の現存仮名消息には、いずれにも例が見えない<sup>9</sup>。

典籍の書写でも、藤原俊成の場合は稀にこの仮名字体を使用し、動詞「見る」を表記した例もあるが、「うつせえ(空蟬)」「せえ(住み)侍て」(顕広切本古今和歌集)「あゑううえ(有磯海)」「御家切本古今和歌集)のようなそれ以外の語彙の表記例のほうが多く、「見る」を「え」以外の字で表記した例も散見され、11-12 世紀の歌書の一般的なありかたと変わらない。

ところが、藤原定家の場合には大きく様子が異なる。その用字法では、「え」字の使用が明らかに動詞「見る」に偏っている。

・「ええすある」「えれと」「えるうゑ」「えゆる」「えて」…(前田本土左日記)

・「えるもの」「えすてゝ」「えせむ」「ええね」「ええやさむ」…(伊達本古今和歌集)

とは言え、「見る」に比して圧倒的少数ながら「えゝる(乱る)」「えゝる(乱る)」(伊達本古今)といった他の語彙の表記の例もある<sup>10</sup> し、「山堂うえゝゑゝわうこし(山高み見つつ我来し)」(伊達本古今)の様に、同音連続の位置に使用した例もあって、定家にとって「え」はやはり仮名であったものと判断すべきであろう。漢字「見」との明らかな字形差(図3参照)<sup>11</sup> もそれを傍証する。一方で、『土左日記』原本には青谿書屋本から見て「え」字の使用はなかったことが強く推測されるから、その書写時、定家の用字選択に明確な意図が存在した可能性は濃厚である。

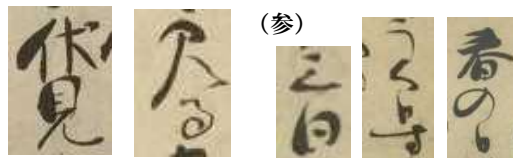


図3 伊達本古今集の「見」と「え」

(参) 同「日」と「日」と「日」?

動詞「見る」を仮名字体「え」専一表記とする用字法の淵源、あるいは伝播の震央が定家にあると判断するのは現時点では全くの早計であるが、少なくとも定家本以外の鎌倉期文学写本で、定家本の場合ほどに顕著にこの傾向を有する資料を見出すのは容易ではない。

室町期に入っても、「え」と動詞「見る」を強く結びつける用字法が直ちに社会に広く一般化したということはなかった。こうした用字法を持たない典籍資料はやはり枚挙に暇

\*9 親鸞筆平仮名本『唯信鈔』には 2 例ある(連続する 2 行に存)が、「え(身)にあひまり」「えされ(乱)」という例である。動詞「見る」は「み」字で表記されている。

\*10 他の定家本まで目を広げても、「えよしの」(嘉禄二年本古今集)などの違例は少数ながら存する。

\*11 こうした「日」の例からすると、定家には、本来の語の表記には訓仮名由来の仮名字体を出来るだけ宛てようという、より大きな方針があったか。但しこうした「日」の用法は、少なくとも「え」のようには後世に継承されていない。

がない。代表的な例を言えば、キリシタン版国字本にはそれを見出すことはできない。

しかし一方で、鎌倉末期以降、定家本と類似の傾向を有する資料は、定家との直接的な表記法上の継承関係を窺いがたい資料も含めて、散発的には指摘でき、次第にその数を増すようである。以下はその例である。これらは、「見」字によって「見る」以外の語彙を表記した例を有しない、という点で、定家よりも徹底した表記法を採っているとも言える。

- ・浄土教版『黒谷上人語燈録』元亨元年 1321 刊本
  - ・「おもんえれい」「見やすく」「見しとま」…  
(参考)「みち」「みれ」「みれもと」「あこと」「みと」「すこやか」…
- ・世阿弥自筆『花伝第六花修』応永 10 年 1403 頃写<sup>\*12</sup>
  - ・「見しより」「見る」「見・きく」「見ゆ」「見わけて」…  
(参考)「堂くこ」「さのこ」「みゝ」「みふ人」「たしあこて」…

では、室町時代において「見」字は、いかなる性質の文字として認識されていたろうか。朝鮮版『伊呂波』(1492 年刊)<sup>\*13</sup> は、「伊呂波」の後に「別作十三字類」として、平仮名主体で書状を書くに当たってどうしても必要な、基礎的な漢字や合字表記などの 13 種類を挙げるが、そのうちの単漢字 7 字(御内申候程給抑)に「見」は入っていない。漢字ではありながら、頻用のために著しく略した字形で書かれ、変体仮名の習得に優先して直ちに身につけることが求められる、「準仮名」とも言うべき漢字群の中には、「見」は加えられなかったのである。「見る」は基礎語彙ではあるが、必ずしも書状の常套語ではなかったからであろう。

他方で、「見」は室町時代当時、例えば片仮名交り文資料を初めとして、「見」の通行の行・草書体でもあった(図 4)<sup>\*14</sup>。平仮名字体「見」と漢字「見」とが、準仮名として融合することもできないまま、用法においても形態においても、明示的な差異を失うという不安定な状態が、この時期に出来たのである。



図 4 『悉曇決撰抄』巻第二  
永禄 8 年 1565 写本

## 5. 近世前期における「見」

鎌倉時代に盛んに見られた仮名文書は、南北朝・室町期にかけて衰勢し、近世に入ると書字教育(候文教育)の普及もあって、公文書の世界からは殆ど姿を消してしまう。それに代わって近世に平仮名の主要な用途となったのは、文学・教養など多岐のジャンルにわたった漢字仮名交り文板本である。

特に散文学板本の表記の淵源を考える上で重要になるのが御伽草子である。次頁図 5 は『文正草子』江戸時代前期頃写本に見える「見」字の使用実態の一部である。この資料では、動詞「見る」の表記は「見」字に限定されない(「み」字も用いられる)が、「見」字は専ら動詞「見る」にのみ用いられる。このように「見」字が動詞「見る」の表記に偏ることとは、御伽草子写本、奈良絵本の類に多く見られる傾向である<sup>\*15</sup>。『花伝一』などに見え

\*12 谷川(2008)に指摘がある。この傾向は、『花伝第七別紙』(応永中期筆)でも等しい。

\*13 詳論は別に譲りたいが、朝鮮資料は、日本人の一般的な書字学習過程の実態を知悉してその構成に活かしたものと思しく、音韻史資料としてと同等、あるいはそれ以上に、日本語表記史資料としての高い価値を有する。但し、朝鮮版『伊呂波』で「見」字は、「まな」として挙げられる青蓮院流いろは手本の「別体いろは」に当たるものにのみ現れるが、これについては、必ずしも当時の一般的な書字教育の実態に忠実なものとは判断できない。

\*14 この字形の出現が片仮名交り文に限るということではない。例えば『花伝第六花修』の奥書「一見も許を廻らうき」の漢字「見」もまた、字形上は仮名「見」と区別が付かない。室町・桃山期の変体漢文資料にも同様の例は多く指摘できる。漢字「見」の字体変遷の記述の精密化も今後必要である。

\*15 御伽草子写本や奈良絵本のどの程度にこの傾向があるか、といったことは一概には言えない。そもそも動詞「見る」の用例自体が少なかったり、「見」字の数少ない例が「見給」「見候」のようにそれだけでは仮名か漢字かの判断の困難なものであったりする資料もあるからである。ただ、「見」字を一定以上の数使用しているこれらの資料で、動詞「見る」以外の語彙にも通用するものは見出し難い。



る、「え」字と動詞「見る」を互いに排他的に関連づけた表記法と、「え」字自体を使用しない表記法との混淆から生じたものでもあろうか。

その結果、定家の場合には、動詞「見る」を「え」字で表記することに主眼があった（従って、「え」字を他の語彙の表記に使用することは許された）のに対して、御伽草子に良くある表記法は、「え」字を動詞「見る」の表記に限定することに主眼がある（従って、動詞「見る」を「み」「と」で表記することは許された）ものとなっている。一見小さくも、その実、聊か本質的な変化が生じている。仮名交り文では、ある語を表記するのに漢字を使用するか仮名を使用するかは書き手の裁量であるが、「見る」を表記するのに「え」字を使用するか「み」「と」を使用するか、ということも、それに準じた範疇のものとなった、ということである。

さて、恐らくはこうした御伽草子写本の表記の慣例が、仮名草子を経て浮世草子、更にはその後の散文文学板本に継承されたのであろう。

仮名草子には、「え」字を動詞「見る」専用（またはそれに近い用法）とし、一方で「見る」の表記には「み」「と」も使用しているものが多く見えるが（『仁勢物語』寛永 17 年 1640 以前刊、『伊曾保物語』万治 2 年 1659 板、『薄雪物語』寛文 9 年 1669 板など）、一方で「え」字を使用するものの動詞「見る」専用とはしないもの（『恨之介』寛文 4 年 1664 板など<sup>\*16</sup>）、「え」字を使用しないもの（『薄雪物語』寛文 4 年 1664 板など）、も猶少なくはない。

浮世草子では、この表記法を採るものが一層多くなる。西鶴本（『好色一代男』天和 2 年 1682 刊、『世間胸算用』元禄 5 年 1692 刊、『西鶴置土産』元禄 6 年 1693 刊などの主要作品）、八文字屋本（『傾城色三味線』享保 17 年 1732 刊、『傾城禁短気』宝永 8 年 1711 序、『世間子息気質』正徳 5 年 1715 序などの主要作品）共に、この用字法が標準的である。

## 6. 近世中後期以降の「え」

洒落本では、浮世草子の様態を継承したものが見られる（『辰巳之園』明和 7 年 1770 刊、『令子洞房』天明 5 年 1785 刊など）。

文学資料で、決定的に事情が変わってくるのは、近世後期の非草双紙系<sup>\*17</sup>の散文学に於いてである。濱田（1979,1993）は、後期読本の仮名字体には「え」が見られないことを報告しているが、これは「え」字そのものが見えなくなったということではなく、「え」字に対して密に振り仮名が付されるようになった<sup>\*18</sup>、ということの結果である。同じことは、人情本に関しても言える（図 6）。これらに対して、仮名草子・浮世草子・洒落本では、振り仮名付刻の本であっても、「え」字に対して振り仮名を付すことはなかった。

言うまでもなく、振り仮名は任意的な表記要素だから、それが付されないことに対して直ちに積極的な意味付けをすることは出来ないが、付された場合の親字に関しては、ごく例外的な場合を除いて、基本的

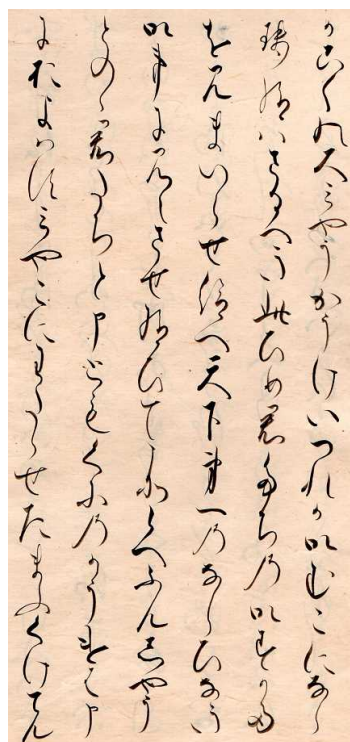


図5 文正草子の一伝本での「え」

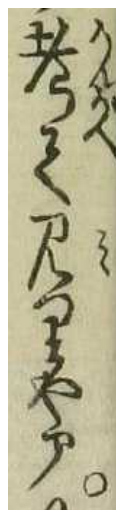


図6 『春色梅児誉美』初編（1833年刊）の例

\*16 この資料では、内題に「うらえのまけ」とある。

\*17 草双紙（黄表紙・合巻）では、そもそも「え」字の例それ自体を有しない場合が多い。

\*18 後期読本でも最初期の山東京伝『忠臣水滸伝』（前編寛政 11 年 1799 刊）は、「見」を楷書体で記した上で振り仮名を付す。この「見」が「え」に置換されたところから生じた表記法か。

には漢字と認定されたものと考えて良い。

ただ、「見」字に振り仮名が付され始めたのが何時頃からのかを特定することは、なかなか困難な作業である。一つの目安として、長期に渡って多くの異板の出版が成されている『女今川』を観察してみる。元禄13年1700板では「見物」(第9条)に対して「見苦」(第13条)とあり、正徳4年1714吉文字屋板も同じ。それに対して、正徳4年1714西村伝兵衛板では「見物」「見苦」、文化9年1812板では「見物」「見苦敷」となる<sup>\*19</sup>。「見苦」のように後に漢字表記語が続く場合には「見」も漢字に解釈されやすくなると思われるが、少なくともそうした場合に関して、早くも正徳頃には漢字と見るか仮名と見るかの意識の拮抗があったものと推測される。

一方で、近世末期に至っても、テキストの性質によっては、「見」字は明確に仮名であった。例として天保2年1831序『教訓世中百首』を取り上げる。同書は、和歌とその頭注(散文)で人生訓を説いたものである。冒頭に取り上げた『人道二十四箇條』と同様、教訓書であると共に歌書でもある文献だが、こちらはより歌書への傾斜が強い。その一つの現れが、写本での朱墨による濁点の書き入れを模したと思われる白圈点による濁点の例である(図7-1)。而して本資料では、和歌部分(図7-2)は勿論、頭注部分(図7-3)においても「見」字は動詞「見る」に限らず、様々な語の表記に現れている。これもまた、幕末期の「見」字の実態の一面であった。

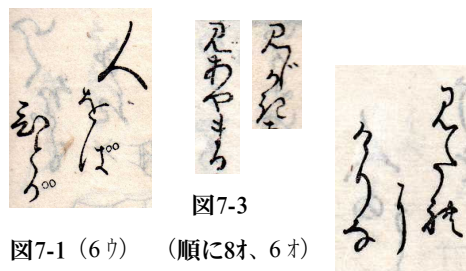


図7-1 (6ウ) (順に8オ、6オ)

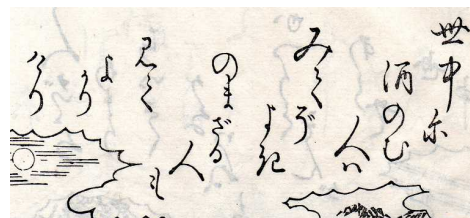


図7-2 (上から順に 40ウ、34ウ)

## 7. 最後に

本発表は「見」の字史についての実に大まかな素描に過ぎない。完成ということの設定しがたい類の課題ではあるが、それでもなお色づけを期さねばならないことは多い。

文字・表記現象にあっては、絶対に忽せに出来ない規則の周辺に、著しく可読性を損ねない限り、一定の幅で書き手の裁量に任されうる領域が、ぶ厚く取り巻いている。「見」字を巡る諸問題もそこに関わる所の多いものである。そこで書き手が裁量権を行使するにあたっての選好のあり方を、各時代について実態解明することもまた、文字・表記史研究の重要な課題であることは論を俟たないが、そうしたものに対して、他の言語要素の場合と同様の方法で解釈を加えても意味のないことである。文字・表記史研究にあっては、より合理的な説明が必ずしもより正しい説明とはならない、と言い換えても良い。「見」字を巡る問題は、そのことを再確認するためにも格好の材料であろう。

## 参考文献

- 谷川淳子(2008)「世阿弥自筆『花伝第六花修』における用字法について」『東京女子大学紀要論集』58-2
- 濱田啓介(1979)「板行の仮名字体—その収斂傾向について」『国語学』118、『近世小説営為と様式に関する私見』京都大学学術出版会1993に再録
- 矢田勉(1999)「『平仮名らしさ』の基準について—一オの仮名を例として—」『国語と国文学』76-5、『国語文字・表記史の研究』汲古書院2012に再録

## 図版出典

- 伊達本『古今和歌集』：貴重図書影本刊行会複製本(1938)
- その他：家蔵本

○本発表は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)19K00625による研究成果の一部である。

\*19 実際の諸版では、これに加えて、「見」を明らかに漢字「見」に作るなどのバリエーションもある。